



「モノ」が語る三つの時代

戸田市の**中世**・**近世**・**近代**

TODACITY

The Three Ages

Medieval Ages

early modern period

modern period

Tokoname
ware

pottery

例言

- 1 本書は、戸田市で出土した中世から近代までの考古資料を解説するデジタル冊子である。資料の撮影および冊子の編集は今井源吾が担当した。
- 2 時代区分は、中世・近世・近代の三期とし、中世は 11 世紀～ 16 世紀、近世は 17 世紀～ 19 世紀中頃、近代は 19 世紀後半～ 20 世紀中頃までとしている。
- 3 ページ上部及び下部のマークは、時代区分を示すもので、中世がオレンジ、近世が青、近代が緑を用いている。複数の時期にまたがる資料については、それぞれの時期のマークを併用している。

中世：  近世：  近代： 

- 4 解説対象となる資料のうち、土器・陶器・^{せっき}炆器・磁器の概要は下記のとおりである。



土器：縄文土器に始まる素焼きの焼き物で、焼成温度はおよそ 800 ～ 1000 度である。酸化焰で焼成するため胎土中の鉄分が酸化し、胎土は褐色に近い色調となる。中世から近代にかけては、かわらけ・植木鉢・瓦などが主な製品として作られた。



炆器：古墳時代の須恵器の系統を引く、高温で焼成される焼き物である。焼成温度はおよそ 1250 ～ 1300 度。陶器・磁器とは異なり、基本的に釉薬を使用しないことが特徴である。製品例としては、備前・明石・堺産の播鉢、常滑の甕が挙げられ、近代にはテラコッタなども作られている。



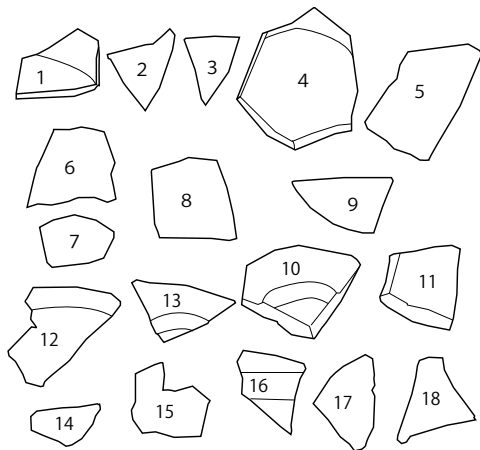
陶器：粘土を原料とし、釉薬を施して高温で焼成する焼き物である。焼成温度はおよそ 900 ～ 1250 度。8 世紀に生産が始まった三彩や緑釉陶器が、日本で最も古い陶器とされる。中世には瀬戸・美濃で盛んに生産が行われ、近世には碗・皿・播鉢・燭台など多様な製品が作られた。近代になると、タイルなども製造されるようになる。



磁器：陶石を原料とし、釉薬を施して高温で焼成する焼き物である。焼成温度はおよそ 1100 ～ 1300 度。胎土が白く、光を通すことが特徴である。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に連れ帰られた陶工によって、17 世紀初頭に伊万里・有田で生産が始まった。碗・皿・仏飯器など多様な製品が作られ、近代には碍子などの産業製品も生産されている。



1



- 1 : 青磁皿・中国同安窯・1150 ～ 1200 年
- 2 ～ 11 : 青磁碗・中国龍泉窯・1200 ～ 1400 年
- 12 : 白磁碗・中国広東産か・1050 ～ 1150 年
- 13 : 白磁皿・産地不明・1050 ～ 1150 年
- 14 ・ 15 : 白磁皿・景德鎮産・1300 ～ 1400 年
- 16 ・ 17 : 青磁香炉・景德鎮産・1500 ～ 1600 年
- 18 : 青白磁器種不明・産地不明・中世

1 貿易陶磁器

戸田市内からは、11 世紀～ 16 世紀にかけて中国で作られた磁器が出土しています。11 世紀～ 12 世紀の平安時代のもは、広東省などで作られたと考えられる白磁の皿や碗です。鎌倉時代以降になると、同安窯や龍泉窯の青磁が多く見られるようになります。

南原遺跡からは、13 世紀～ 14 世紀の龍泉窯の碗が多く出土し、上戸田本村遺跡からは、16 世紀代の景德鎮の青磁香炉が出土しています。



2

2 中世陶器（瀬戸美濃）

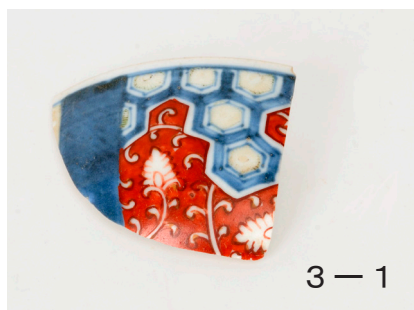
中世において継続して施釉陶器を生産していたのは、愛知県瀬戸市の瀬戸窯のみでした。窯の形態から、11世紀後半～15世紀後半までを「古瀬戸様式」、15世紀後半～16世紀を「大窯期」と呼びます。

古瀬戸様式の前・中期には、富裕層を対象とした大型の壺や瓶類が主に生産されましたが、後期以降になると天目茶碗・盤・摺皿・播鉢などの日用品の生産も行われるようになり、全国的に広く流通するようになります。戸田市域では、14世紀後半以降の瓶・碗・皿・盤などが出土しています。画像の資料は、14世紀～16世紀代に生産された古瀬戸様式後期および大窯期のものです。

画像下の黒い鉄釉をかけた碗は天目茶碗、その隣の白い長石釉をかけた皿は、いわゆる志野皿と呼ばれています。



3



3-1

3 磁器（肥前）

日本国内で磁器の生産が始まるのは17世紀以降です。画像の資料は、現在の長崎県・佐賀県（旧肥前国）で生産されたもので、18世紀までは磁器の生産地域は基本的にこの地域に限られていました。

戸田市で出土する肥前産磁器は、17世紀のものはほとんど確認されていませんが、18世紀後半以降になると出土例が増加します。画像の資料は18世紀～19世紀中頃のもので、釉薬の下に呉須で絵付けを行う「染付」と呼ばれる技法で作られています。一方、3-1の碗は釉薬の上に赤や金色で文様を描く「色絵」と呼ばれるもので、染付よりも高級品でした。



4 磁器（瀬戸美濃）

関東では焼き物のことを「せともの」と呼ぶように、瀬戸・美濃製の磁器は関東地方に広く流通しました。瀬戸・美濃で磁器が本格的に作られるのは19世紀初頭以降であり、戸田市域でも19世紀になると、肥前産磁器に代わって瀬戸・美濃産磁器の出土数が増加していきます。

瀬戸・美濃産磁器と肥前産磁器の見分け方としては、瀬戸・美濃産は呉須の発色が良く、にじむものが多いことが挙げられます。また、釉薬がガラス質で肥前産に比べ光沢をもつという特徴があります。



5 陶器（瀬戸美濃）

瀬戸・美濃では、中世に引き続き近世においても、陶器製の碗・皿・甕などが生産されていました。画像の資料は、18世紀～19世紀中頃にかけて作られたものです。このうち、右端に見える大皿は、19世紀になると肥前産のものを含めて多く生産されるようになり、お祝いや儀式など、複数人で会食を行う場で使用されました。長崎県の卓袱料理^{しっぽく}などの普及により、一つの皿の料理を各自が取り分けて食べる風習が広まったと考えられています。

5-1は皿の破片で、外面と内面上部に緑釉が施され、角がゆがんだ形状をもつことから、16世紀後半～17世紀初頭に流行した「織部焼」に近い器形とみられます。これは、19世紀前半～中頃に生産されたもので、この時期には、瀬戸・美濃で織部焼に似た陶器が再び作られたため、「復興織部」と呼ばれています。



6

6 陶器（京・信楽）

京焼は、現在の京都府京都市周辺と滋賀県信楽で生産された陶器のことで、特徴は陶器に色絵を使用することです。画像の上段2点は18世紀代の碗で、碗の外面に赤や緑で笹文様を描きます。

下段は19世紀の小杉碗と呼ばれる小型の碗です。小杉碗は、武家屋敷などがら多く出土し、農村からの出土が少ないため、江戸時代の階層性を物語る資料の一つになります。



7

7 土瓶（伊賀・信楽？、大堀相馬？）

外面に銅緑釉をかける土瓶の破片で、19世紀代のものです。初期は伊賀・信楽で生産され、その後福島県大堀相馬焼や北関東の諸窯で生産されました。産地の特定が難しい器種とされていますが、戸田市出土のものは胎土が細かいため、伊賀・信楽もしくは大堀相馬焼の可能性がありますが。



8

8 陶器（肥前）

肥前産の陶器は、16 世紀後半から現在の佐賀県唐津を中心に生産されました。写真左は胴緑釉をかける碗口縁部の破片、右は象嵌^{ぞうがん}で三島暦^{みしまて}のような文様を付ける「三島手」と呼ばれる皿で、いずれも 17 世紀後半～18 世紀前半のものです。肥前陶器は、18 世紀前半ごろまでは関東でも出土しますが、18 世紀後半以降はみられなくなります。



9

9 陶器（志戸呂？）

志戸呂焼^{しとろ}は、現在の静岡県島田市で生産された陶器のことです。15 世紀後半に始まり、継続して生産されるようになるのは 16 世紀後半からとされています。志戸呂焼の特徴は、近世になると鉄釉陶器が主体となることで、徳利、小皿、播鉢などを主に生産していました。画像は、灯明皿で内面全体と外面の半分程度に鉄釉をかけています。



10 — 1



10 近代磁器（瀬戸・美濃、肥前）

19 世紀後半の明治時代以降に生産された磁器です。左下 10 - 1 の 2 点は 19 世紀後半の、その他は 20 世紀前半に生産されたもので、後者は主に 1920 年代後半～1930 年代に使用されたとみられます。明治時代になると窯業においても西洋技術が導入され、呉須よりもより青く発色する酸化コバルトや緑色の酸化クロム、ピンク色の正円子など、江戸時代と比べると色合いがカラフルになります。絵付けの方法も型紙刷りや銅板転写、ゴム印、吹き絵など簡略化された方法も導入されます。また、電柱で使用する碍子など、生活用品以外にも使用されるようになります。

外面



内面



11

11 片口鉢（常滑）

12世紀～13世紀に愛知県常滑で生産された鉢です。口縁部に注ぎ口を設けていることから「片口鉢」と呼ばれています。擂鉢と同様にすりこ木を用いて麦や大豆などをすりつぶし、味噌や豆腐などを作るのに使われたと考えられます。また、薬を調合するためにも使用されました。古いものは底部に高台を付けていますが、時代が下ると平底のものが作られるようになります。

外面



内面



12

12 片口鉢・摺鉢（常滑・瀬戸）

15 世紀～16 世紀に愛知県常滑で生産された片口鉢と瀬戸で生産された摺鉢です。上部左側は 16 世紀代の片口鉢、その他は摺鉢になります。すり目が付く摺鉢は備前・珠洲などで 13 世紀代、瀬戸では 15 世紀以降に生産され、全国的に普及するようになります。中世段階の摺鉢はすり目がまばらですが、近世になると全体にすり目を配置するようになります。

外面



内面



13

13 摺鉢（瀬戸美濃・丹波・堺明石）

江戸時代になると、摺鉢の内面全体にすり目が施されるようになります。17世紀～18世紀前半にかけては瀬戸美濃および丹波のものが主体ですが、18世紀中頃以降になると堺・明石のものが増加します。

画像上段左の2点は瀬戸美濃産で、鉄釉が施された陶器質の摺鉢です。下段右は丹波産に分類されます。その他のものは、堺・明石、もしくは備前産の摺鉢と考えられます。なお、瀬戸美濃産以外の摺鉢は、いずれも釉薬をかけない炻器質の製品です。

14 おろし皿（瀬戸）

14世紀～15世紀に瀬戸で生産されたおろし皿です。現在と同じように使われていたと考えられています。近世でも生産されますが、中世と比較すると生産量は減少します。



15 石臼（不明）

片口鉢・播鉢のほかにも、穀物などをすりつぶすための道具として石臼があります。戸田市域で石臼が普及するのは15世紀後半以降とみられ、画像のものは15世紀後半～16世紀前半の堀・溝から出土したものです。石臼自体は近世・近代を通して使用されましたが、戸田市内では近世以降の石臼は出土していません。



16

16 ほうろく（在地産）

ほうろくは、豆類などを炒るために使用された道具です。左上は15世紀後半～16世紀前半のもので、この時期のほうろくはバケツ状の形をしており、「内耳土鍋」と呼ばれます。江戸時代になると、下段の2点のように浅い皿状へと変化します。この器種は都市と農村で形態が異なります。農村では囲炉裏に吊るして使用するため、内側に耳（取手）が付き、底も平らになります。一方、都市部では竈に置いて使うため耳がなく、底は丸く作られます。戸田市域では、耳が付き平底のタイプしか出土していないことから、近世では主に囲炉裏が使用されていたとみられます。さらに、明治時代には上段右上のような丸底のほうろくが出土しているため、19世紀後半になると竈が普及したと思われます。



17 片口鉢（瀬戸美濃）

瀬戸美濃で生産された片口鉢で、18世紀～19世紀前半のものです。口縁部に注ぎ口をもち、内面が厚く返し状になることから、主に液体を注ぐための器種とみられ、その他にも販売用容器やこね鉢など、さまざまな用途に使用されました。画像左の鉢の底面には「□（上カ）入」と墨書があることから、特定の物品を保管するために用いられた可能性があります。



18 茶釜（在地産）

湯沸かし用に使用された土器製の茶釜です。15世紀後半～16世紀前半に生産されたもので、外側に耳がついていることから、吊るして使用されたと思われます。



19



19 — 1

19 急須・湯呑（肥前・瀬戸美濃）

急須は淹茶^{えんちや}に用いられる器種ですが、普及するのは比較的遅く、発掘調査では19世紀中頃から検出例が増加し、19世紀後半以降になると一般家庭でも使用されるようになります。上段左は19世紀中頃の、右は19世紀後半以降の急須です。

19-1にみられるように、江戸時代の急須には底部に煤が付着している例が多く、湯沸かし器としても使用されていたと考えられます。明治時代になると、現代と同様に喫茶専用の器種として定着していきます。



20 大甕（常滑）

愛知県常滑では、中世を通して酒や染料などの液体を貯蔵するための大型の甕が生産されていました。これらは全国的に流通していることから、海運を利用して各地へ運ばれたと考えられます。近世になるとまげもの曲物に代わりゆいおけが普及し、大型の製品が登場したため、甕の生産量は次第に減少していきました。

戸田市では12世紀後半～16世紀代までのものが確認されており、下段のものは13世紀後半の大甕で、復元された高さは60.6cm、口縁部の直径は44.3cmにもなります。



21

21 徳利・小盃（肥前・瀬戸美濃）

徳利は酒や油などの液体を貯蔵する器種で、近世になると大量に生産されるようになります。江戸遺跡など都市部では非常に多く出土しますが、農村地域では出土数が少なく、戸田市域では19世紀以降に生産された徳利が確認されています。

画像中央の徳利には、釘描きで「三川」と刻まれています。近世では酒屋が徳利を貸し出し、そこに酒を詰めて販売していました。徳利が空になるとまたそれを持参して酒屋で購入する仕組みであったため、紛失や混同を防ぐ目的で徳利に屋号を付けることが一般的でした。そのため「三川」も屋号であったと考えられます。また、右端の徳利は瀬戸美濃産の爛徳利、左端は肥前産の磁器徳利になります。



22

22 硯・水滴（肥前・不明）

近代以前は、読み書きができる人が限られていたため、戸田市域のように農村であった場所で、文字に係る資料が出土することはほとんどありません。画像上部のものは13世紀代に東海地方で作られた山茶碗で、美女木八幡社脇遺跡の井戸底部から出土したものです。内面に墨が付着しているため、硯として代用されたとみられ、出土位置及び状況から中世佐々目郷に係る資料と思われます。また右下は石製の硯で、南原遺跡の方形周溝墓から出土しましたが、中世資料の可能性もあります。左下は、19世紀の肥前産の水滴で、硯に水を注ぐための道具です。



23

23 紅皿（肥前）

紅は、紅花から抽出したもので、現在同様に口紅として使用されるものです。高級品であったため、小口の容器に塗りつけて販売されていました。

画像のものは19世紀前半～中頃に肥前で生産された紅猪口と呼ばれる小売用の器種です。外面は型打ち成形により、貝殻状の縦筋をつけています。



24

24 灰落とし・煙管（瀬戸美濃・不明）

アメリカ大陸の風習であった喫煙は、15世紀末にコロンブスが持ち帰ったことを契機に世界各地へと広まり、16世紀後半以降には日本にも伝来しました。戸田市内でも煙草に係る遺物が出土しており、左は18世紀代に瀬戸美濃で生産された灰落としで、煙草の灰を捨てるための器種です。右の甕は、18世紀代に瀬戸美濃で生産された銭甕で、用途は別にありましたが、口縁部に打刻痕を確認できるため、灰落としに転用されたとみられます。下は、パイプの先端につける^{がんくび}雁首で、^{しんちゆう}真鍮製のものです。



25

25 仏具・神具（肥前・瀬戸美濃）

江戸時代になると、屋内に仏壇や神棚などを置くようになり、それに合わせた専用の器種も生産されるようになります。上段のものは近世の仏具、下段は近代の神具です。上段左2点は香炉で、一番左が19世紀の瀬戸美濃、右は肥前の三足付香炉です。右から2番目は18世紀前半の肥前磁器の仏飯器、一番右は瀬戸美濃の燭台になります。下部の2点は、20世紀前半の徳利です。



26

26 土器皿（在地）

出産後に排出される胎盤（胞衣）を住居内の特定の場所に埋める行為は、縄文時代から行われていたとされ、地域によっては戦後まで行われていました。戸田市域で出土した土器皿は破片ですが、中央に寿の異体字である「壽」が陽刻され、近接箇所から2個体が出土しています。いずれも19世紀後半のもので、二枚一組で合わせ口にして胞衣を埋納した胞衣皿として使用されたと考えられます。



27

27 火鉢（在地）

暖房器具である火鉢は、14世紀以降になると奈良火鉢とよばれる瓦質焼成^{が しつしょうせい}の火鉢が生産され、中世を通して全国に流通します。瓦質焼成の火鉢は風炉^{ふうろ}とともに、城館跡や寺院跡など特定の場で出土するため、在地の有力者層が主に利用していたと考えられます。画像左は、瓦質焼成の火鉢で、底部中央に小さい穴があけられているため、植木鉢に転用された可能性があります。右は、口縁外面に丸いスタンプ文様を付けています。2点とも15世紀後半～16世紀前半のものと考えられます。



28

28 火鉢・サナ（目皿）（在地）

近世になると、火鉢は江戸周辺で生産されるようになり、一般庶民にまで普及しました。画像左は土器製の火鉢で、底部に「三足」と呼ばれる半球状の脚がついています。床面が被熱しないための工夫とみられます。右は、サナ（目皿）と呼ばれるもので、^{こんろ}焔炉と呼ばれる加熱用具の中に入れて、仕切りとして利用されました。



29



29-1

29 かわらけ（在地）

中世の遺跡からは、ロクロで製作されたかわらけと呼ばれる土器小皿が多量に出土します。儀礼の場での飲食や、灯明具など様々な用途に使用されていました。戸田市内では15世紀～16世紀ごろのかわらけが出土します。近世でもかわらけが生産され、29-1は19世紀前半ごろのカワラケです。中世と比べると焼成が良好になります。



30 油皿・灯明受け皿（瀬戸美濃・信楽？）

灯明用具は中世まではかわらけ等を使用していましたが、近世になると専用器種が生産されます。画像は19世紀前半～中頃の油皿・灯明受け皿です。左側の錆釉は瀬戸美濃産、右側の灰釉のものは信楽産の可能性がありますが。油皿は、皿のなかに菜種油をいれ縄を浸透させ火をつけるもので、口縁の淵に煤が付くものが多いです。灯明受け皿は、内面に環状の突帯をもつ器種で、油皿の下に置き、落ちる油を突帯の内側で回収するためのものです。



31 砥石（産地不明）

中世・近世を通して最も多く確認される石造物は砥石です。画像のものは中世の遺構から出土したもので、いずれも長方形を呈しています。四面全てが研磨されているものが多く、長く使用されたものは、先端が方形から三角形状になっています。画像のものは、大きさから持ち運び用の砥石と思われます。

近世～近代の絵付け技法

染付の技法は、基本的に手書きですが、17 世紀後半～18 世紀前半には型紙摺りや吹き絵、こんにゃく版などのスタンプ文様を使用します。18 世紀以降は使用されなくなり、再び使用されるのは明治時代からです。19 世紀後半の型紙摺り、19 世紀末の銅板転写、20 世紀前半の吹き絵・ゴム版絵付けなど、技法を知ると磁器の年代が分かります。



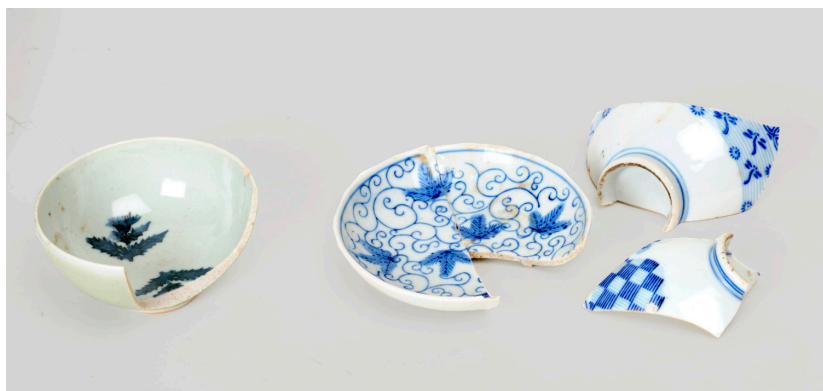
型紙摺り

左が 20 世紀後半の瀬戸美濃の碗、右が 17 世紀後半～18 世紀前半の肥前の皿です。明治時代のもは酸化コバルトのため、江戸時代のものに比べ青の発色が良くなります。型紙刷りの特徴は、線を繋げることができないため、短く途切れていることです。



銅板転写

2 点とも 20 世紀前半のものですが、左が酸化コバルト、右は酸化クロムを使用します。酸化クロムを使用する銅板転写の製品は 1930 年代によくみられます。銅板転写の特徴は、線内部を塗りつぶすダミ部分を細かい線の集合で描くことで、濃淡は線の本数によって描写されます。



ゴム版絵付け

左は 17 世紀後半～18 世紀前半の肥前の青磁染付碗、右は 20 世紀前半の瀬戸美濃の染付製品です。ゴム版絵付けの特徴は、文様の中心部分と比較して周辺部分が薄くなる傾向にあることです。



吹き絵

17 世紀前半から使われる技法ですが、戸田市内では現在のところ吹き絵を利用した江戸時代の磁器は出土していません。近代では、19 世紀末から使用され、20 世紀前半頃の製品に多くみられます。

参考文献

- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房株式会社
- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』 愛知県
- 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』 愛知県
- 浅野晴樹 2020 『中世考古〈やきもの〉ガイドブック』 新泉社
- 日本中世土器研究会編 2022 『新版 概説中世の土器・陶磁器』 有限会社真陽社

発行・編集：埼玉県戸田市教育委員会

発行日：令和7年12月18日